

# 近江路の俳諧

—愛知川の俳諧額と京の宗匠五仲庵有節—

藤井 美保子

愛荘町歴史研究 第2号 別刷  
愛荘町教育委員会 文化振興課  
2009年2月



## 近江路の俳諧

— 愛知川の俳諧額と京の宗匠五仲庵有節 —

藤井美保子

はじめに

昨年発刊された『近江 愛知川町の歴史・文献史料編』（以下『文献史料編』）の第七節「文雅を樂しむ」には江戸時代に中宿の河脇神社と豊満の豊満神社に奉納された俳諧額各一額が翻刻掲載されています。奉納とは法楽思想に基づいて、音楽や詩歌を手向けて神仏の心を和らげようと、祈願のため社寺にその作品を納めることです。奉納和歌、奉納連歌は奉納俳諧へと引き継がれ、江戸時代各地で盛行し、現代にも及んでいます。

奉納俳諧は社寺などで連句会、発句会を催し、優秀な作品を選考して巻物にしたり、額に仕立てて神仏に奉納しました。その興行の際に座を指導したり、撰に当たったりするのが宗匠ですが、河脇神社弘化三年の俳額は日野の人日庵木壺<sup>①</sup>が撰し、豊満神社慶應二年の俳額は京都の五仲庵有節が撰をしました。

人日庵木壺は近江日野地方の一俳諧宗匠ですが、一方、五仲庵有節は幕末から明治にいたる関西旧派俳諧<sup>②</sup>の大御所であり、慶應二年時点、その名は全国に知られていました。どのような縁から奉納額の撰に携わったか詳らかではありませんが、著名な宗匠を撰者に冠した愛知川の俳人達の意気は高いものであったでしょう。愛知川の神社に掲げられた俳諧額は貴重な文化財

ですが、そこから当時の人々の生活を垣間見、また五仲庵有節という一人の俳諧宗匠を追ってみたいと思います。

### （一）河脇神社弘化三年奉納額

— 神の木に咲からみけり藤の花 鷄玉 —

どんな句が奉納されているのか、弘化三年（一八四六）河脇神社の木壺宗匠撰額を見てみましょう。巻頭の発句

松ありて見ごたえのする桜かな 愛知川 止中

どこに咲く桜を作者は感嘆して見ているのか、おそらく普段見慣れた村社——河脇神社の境内に、松の緑と配されて満開に咲く桜。その思いがけず見ごたえ充分な姿に作者の満足感が伝わる句です。止中は奉納額の巻頭に句がありますので、社中や地域で有力な人物と考えられますが、登場はこの発句のみです。おそらく愛知川で古老とされる人物でしょう。冬、河脇神社の境内は殺風景でうら枯れています。往時の河脇神社には池も藤棚もあって、春には「神の木に咲きからみけり」と、ご神木に房長く藤の花が咲いていたのではないのでしょうか。

聞きなれぬ声を覗くや茶摘歌 下一色 鎌丈

茶畑に歌われる茶摘歌、其声の主を見ようと遠慮がちに「覗くや」と言っていますが、背の低い茶の木からどうやって、と愉快な気持ちにさせられます。滑らかさに欠けませんが微笑ましい初夏の人事句。

剃刀の刃音も高き寒さかな 八木 小齋

剃刀という危険な器物を詠むのは、それなりに技量を要するものと思いますが、冬の朝の冷たい大気と剃刀の刃音が、男性ならではの豪快で緊張の高い句に仕上がっています。彦根藩士であった森川許六の剃刀の句が思い起こされます。

大髷に剃刀の飛ぶさむさかな 許六(韻塞)

一見平俗な句ばかりと見なされがちな江戸時代後期の俳諧ですが、河脇神社の奉納俳句には、平易な中にも繊細な感受性や人なつこさ、思いがけない強さ野太さがあります。ところで判者木壺の句は、というと

しらぬ顔しそのふたる日傘かな 判者

俗気横溢、人との付き合いや振る舞いを好んで詠んでおり、句作りにおける当時の宗匠達の関心が窺えます。俳諧額の句を詠んでいくと、江戸時代の愛知川の人々の生活や心の動き、氣風が垣間見えて、ひととき昔の人と隣り合う気持ちにさせられます。

額の大きさは縦一・四段、横三段。発句数八十三、追加三句。奉納発句合、題「四季の部」「神祇」。出句した俳人たちは愛知川、能登川近在の人々で、願主は市村の鶏玉と八鳥の列竹でそれぞれ六句献句しています。



奉納俳諧額 天保七年芭蕉堂蒼虬撰

(二) 豊満神社拜殿と慶應二年奉納俳諧額

— 拜殿に雉の眠るや春の雨 九阜 —

豊満神社拜殿には、天保七年(一八三六)から昭和十年まで大小十七もの奉納俳諧額が掛っています。

日本では各地の寺社に絵馬や和歌をはじめ種々様々な奉納額が納められています。豊満神社の俳諧額は、二頁以上のものが大半で、額の大きさ、掲載句数の多さは特筆に値します。風化して細部まで読み取れない額がほとんどですが、広い拝殿の中、掲げられた俳諧額の数は人々が熱心に俳諧に打ち込んでいたことを物語っています。

この中に、京の芭蕉堂成田蒼虬<sup>⑤</sup>の額と、前記した五仲庵沢有節撰の額があります。有節が著名な俳諧宗匠であることはすでに述べましたが、蒼虬も、「天保三大家」の一人と呼ばれたさらに有名な宗匠で、有節の師匠でもありました。「謎芭蕉堂宗匠撰」と大書された蒼虬撰天保七年の額は、長さ三・八頁、縦〇・八頁と、十七面の俳諧額の中で一番大きく造作も立派で、他を圧倒しています。

さて『文献史料編』に翻刻されている有節が撰した俳諧額について見ていきたいと思えます。河脇神社の俳諧額から二十年過ぎた慶應二年に奉納されたもので、肥田村の俳人達が中心になっています。俳諧額には「奉納御宝前発句集」、五仲庵有節

| 慶應二年<br>(1866) |      |       |
|----------------|------|-------|
| 豊満             | 五仲庵撰 | 皐鶴評   |
| 所春鳥            |      | 9 7   |
| 所皐鶴            |      | 8     |
| 所梅嶺            |      | 8 7   |
| 所九皐            | ★    | 14 11 |
| 所文中            |      | 3 3   |
| 所旭松            | ★    | 3 2   |
| 所秋月            |      | 3 1   |
| 所乙文            |      | 3 6   |
| 所一笑            |      | 1     |
| ふこうじ花染         |      | 2 2   |
| ふこうじ旭山         | ★◎   | 1 1   |
| ふこうじ山月         | ★    | 1 1   |
| フコウジ芦鶴         |      | 1 1   |
| フコウジ法応         |      | 2     |
| フコウジ竹友         |      | 1     |
| フコウシ山風         |      | 1     |
| フコウシ梅園         |      | 1     |
| フコウシ唐扇         |      | 2     |
| 稲葉水月           |      | 2 2   |
| イナハ遊染          |      | 2     |
| イナバ清風          |      | 1 2   |
| 種村石羊           |      | 3 3   |
| 種村子保           |      | 1     |
| 大門梅香           |      | 5 7   |
| カナター花          |      | 6 3   |
| 信州市翠           |      | 2     |
| 妙福寺鳥白          |      | 2 1   |
| ナカノ富士          |      | 1     |
| ミツムラ文塘         |      | 2     |
| 下ノ郷朝湖          |      | 1     |
| 大久保寿山          |      | 1     |
| 春来             |      | 2     |
| 花寿             |      | 2     |

「奉納御宝前発句集」出句者  
 ★印『しぐれ会』に出句  
 ◎印『類題花筏集』名録掲載

宗匠撰とあります。しかし有節の撰は上段のみで、下段は「儂雲堂皐鶴君 花評」と、皐鶴君という人物の選評になっています。出句者は上段とほぼ同じですから、五仲庵系の、俳諧に遊ぶ近江の名士であると思われる。

左に五仲庵撰、皐鶴君撰による選評の数を表にしました。これによると出句者は「所」と肩書きされている肥田村の人々が九名、フコウジ九名、イナバ三名、種村二名、他は大門など近在の村から一名づつ参加しています。一番多く出句しているのは所(肥田)の九皐という俳人が二十五句、次が春鳥十六句、梅嶺十五句となっています。三十年以上前になりますが、天保年間の義仲寺『しぐれ会』<sup>⑥</sup>を見ると左記の内、九皐、旭松、旭山、山月の名前が出ています(★印)。若いころから近江路の俳諧に親しんだ人々であるのでしょう。また旭山は弘化三年『類題花筏集』<sup>⑦</sup>の名録に近江の俳人として登場する人物です。(◎印) 奉納俳諧の題は「雑煮・春ノ月・梅・春雨・猫の恋」。みな春の題ですが、雑煮、猫の恋などいかにも俳諧らしい題が選ばれています。

さきほど名前の出た人々を中心に句を拾ってみましょう。

春雨や山の向ふに雪の山 春鳥

春鳥の発句、巻頭にふさわしく大きな景をおだやかに詠んでいます。春鳥は出句数からもこの奉納俳諧の発起人の一人ではないかと思えます。また額の下段最後に「清記・春鳥」とあり、この奉納俳諧を清書し、額の揮毫をした人ではないかと思われまます。額に書かれた題字も発句の文字も力に満ちかつ優しく、春鳥は書の名手であったことでしょう。句は他に

難波津は梅に夜潮の明りかな 春鳥

恋瘦せてみしほらしさや宿の猫 春鳥  
があり、大坂にも出向いた商人ではないでしょうか。

三階に影引松や春の月 皐鶴

池中の鎮守を越すやむめの影 皐鶴  
奉納額下段で撰評をしている皐鶴の句です。通常は宗匠が撰をするところですが、実力があっても宗匠を名乗らない人、たとえば退隠した身分の高い武士の場合などが考えられます。この額では「僊雲堂皐鶴君 花評」と敬意をもって表記されています。

「影引く松や」の句ですが、三階の高殿から春の月を眺め、長い松の影を面白く見る作者はどのような人でしょうか。天保十三年に徳川齊昭が作った水戸の借楽園には、好文亭という二層三階の建物があり、三階は楽寿楼という四季の風景を眺め楽しむ高殿になっています。皐鶴君はそのような高殿に出入りできる、相当な名士のようなようです。

「池中の」の句は豊郷町安食阿岐神社<sup>®</sup>の東西にある神池・

神島を思い起こさせます。神社本殿はかつて四周を池に囲まれた島であったといわれ、現在東西にある神池にも出島、中島が合わせて十二あります。社が祀られている島があるのか未調査ですが、池畔の梅が池中の鎮守に優美に枝を伸ばしている景が目につかびます。

日枝の灯のうへに澄けり春の月 旭松

琵琶湖東岸に住む人ならば、この情景は易々と描けるものでしょう。夜、琵琶湖の対岸には、比叡の山に衆生を救う延暦寺の法灯が点つています。そしてさらにその上から、澄んだ春の月が大きく下界を照らしている。春でも法の月は朧月ではなく「澄みにけり」なのでしょう。旭松は天保五年の「しぐれ会」にも出句が確認できるベテランです。他には「狩衣で雑煮祝ふや加茂の社家」「漏すらし水も音なしはるの月」などがあり、達者な作者と思えます。

さて、この奉納額でもっとも重要な作者は、というところ九阜を押さないわけにはいきません。出句数は二十五句と最も多く、句調も格調高いものがあります。

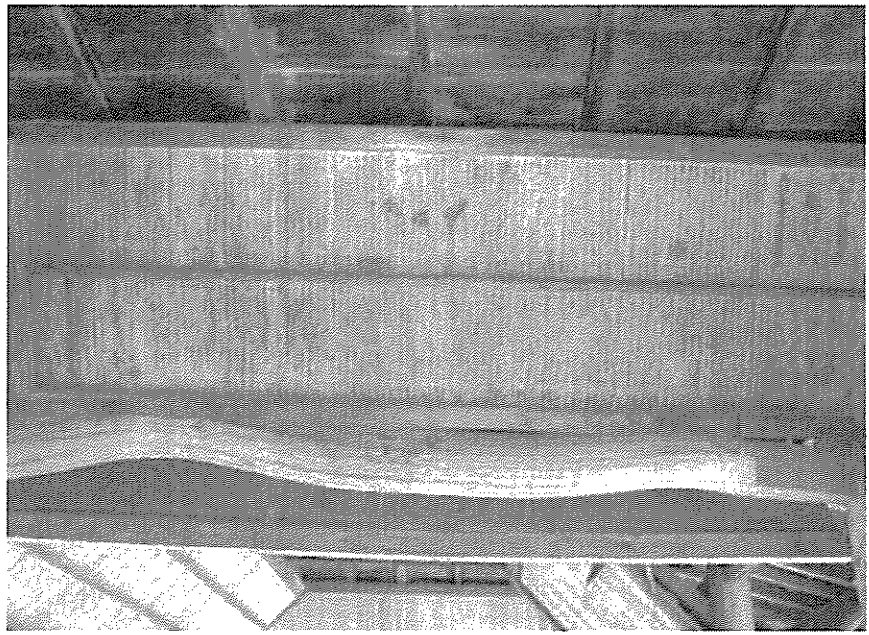
拝殿に雉の眠るやはるのあめ 九阜

春雨や心の隙をくれかねる 九阜

梅さくやなかは巻たる玉すたれ 九阜

暇なき物見車やむめのそら 九阜

春の夜や雨漏りさがす手行燈 九阜



奉納俳諧額 慶應二年五仲庵宗匠撰

いずれも品があって情緒があります。「しぐれ会」の中に九  
 臯をさがすと、文政六年（一八二三）から天保五年（一八三四）  
 までほぼ毎年出句。俳諧をはじめたのが二十歳頃としても、奉  
 納額を納めた慶應二年（一八六六年）は六十三歳、巻軸の句を  
 飾るにふさわしい長老です。（残念ながら巻軸の九臯と判者五  
 仲庵の句は風化により一部の文字と名前しか判読できません。）

その他の作者の中から好ましい句をいくつか上げておきたい  
 と思います。その発句を並べてみると、何代もの間近江の地に  
 住み、暮らしている人々の春の営みが豊かに織り込まれ、絵巻  
 物のように広がっていきます。

|                |        |
|----------------|--------|
| 箸取らぬ子も別膳の雑煮かな  | ナカノ 富山 |
| 白梅に添し手紙や京便り    | フコウジ山風 |
| 春雨や舟窓ぬける根なし雲くも | フコウジ山月 |
| 春雨やふとはつんたる小半時酒 | 種村 石羊  |
| 春雨や根の付きそふな奥の客  | 所 一笑   |
| 春雨やきのふに替る麦の丈   | フコウシ花楽 |
| 豊かなる山の備へや春の月   | フコウジ旭山 |

新年に新しく家族となった幼子にも祝の膳があり、梅の頃には  
 京からゆかしい便り、春雨の降る頃には湖に舟を浮かべて、  
 舟窓から根なし雲を見ている。時にはつい自分にこながら酒を  
 はずみ、春雨が降ると客も長居を決め込む。外の畑には昨日か  
 らまた伸びた麦。そして春の月はこの村を守るように山の備え  
 となっているようです。

(三) 京の宗匠五仲庵有節

愛知川の奉納額の撰をした五仲庵有節、本名沢元衡は文化二  
 年（一八〇五）、信濃国上田の生塚<sup>①</sup>に生まれ、通称を滝沢与  
 四郎、青年期まで大工を業としていました。

『長野県俳人名大辞典』には  
 俳諧を小叢庵確嶺に学び、江戸に出て同庵に起居、執筆役

をした。この頃椿海と号した。のち諸国を行脚、天保六年春、蘭堂有節と改号、記念に『浜荻集』を刊行、二年後には京都東山に居を定め『たねぶくろ』を刊行。この頃沢姓に改めて、成田蒼虬に師事した。・・・中略・・・嘉永元年頃から次第に人気を得、番付などの上位にランク、関西屈指の存在となった。

と紹介されています。愛知川で奉納額の撰をした慶應二年は六十二歳です。押しも押されぬ京の宗匠となっていました。しかし、その名声にもかかわらず、郷里の歴史のなかではあまりその名を語られてはいないようです。資料は限られています。長野の田舎を出て俳諧師で身を立とうとした青年有節について、師匠確嶺の書簡と近年翻刻紹介された『五仲庵有節句集』<sup>⑧</sup>を中心に述べてみたいと思います。

#### 尾張の国に入りて

山なくて日も永き也大根引

いっしか清き渚の辺りに至るに例の浜荻なん是なりとて人々案内しくれければ

ゆさふりて淋しからずや昼の萩

天保六年（一八三五）三十一歳の有節は行脚放浪の旅に区切りをつけ、名古屋の地でそれまでの椿海という俳名から蘭堂有節と改めました。その記念集である『浜荻集』では当時著名な三河岡崎の青々処卓池との両吟歌仙をはじめ、秀外、蓼光、岱年らと四吟歌仙を巻き、プロの俳諧師として名乗りを挙げています。

業として俳諧を志す者は芭蕉の例にならない、修行として必ずといってよいほど各地を行脚していますが、有節の場合はどう

しても旅に出なくてはならない事情がありました。

#### (A) 江戸小蓑庵放逐と行脚

有節は郷里で滝沢与四郎という大工でしたが、信州上田に門葉を広げていた確嶺の讒言にふれ、江戸本町一丁目小蓑庵を開いていた確嶺に弟子入りしました。その時期ははっきりしません。天保初年頃の二十五、六歳ではなかったかと思われま。若い有節は確嶺のもとで、風雅の道を歩む為の様々な教養を身に付ける修行をしていたと思います。やがて椿海という号をもらい、小蓑庵の執筆として他の弟子達と切磋琢磨の日々が続いていってしょう。

しかし、天保四年、確嶺が地方の門人を訪問するため江戸を留守にした時、有節は同輩との争いがあったのか、若気による悪心が起こったものか、小蓑庵をかき乱し出奔してしまいます。そのいきさつは翌天保五年、椿海の出身上田の門人成績に宛てた確嶺の書簡にあきらかです。長い手紙ですが一部省略して読み下してみましよう。

椿海義、私留守中、<sup>さきて</sup>諸々連中へ月並句会の義は相休み候お

もむき相断り、猶又諸々より参り候点取懐紙等は投込み、

朱料をむさぶり、懐紙は返却致さず、種々の不埒致し、正

月中家出致し、西の久保史千と申者の方に居候内、

大火の砌、庵へ参り候を組合中立入、「先生も留守の内也、

不埒の事共ありては宜しからず」と相進め、差留置候処、

又々自他の品々持出し欠落同様に上州、野州、武州、常州、

房州の連中と相廻り、庵中のこと共悪口致し、連中の出入

りを差留、其上小蓑庵椿海と名乗り、江戸飯田町に住庵の



由申ふらし、小蓑庵を有てなき如くに致し、……

ここまでの内容を簡単に記すと、椿海が師匠確嶺の留守中に小蓑庵中で種々不埒を働き、正月に史千という俳人（江戸にいた大家鳳朗の弟子）のもとに逃げ込んでいたが、（天保五年二月の）大火で焼け出され、おめおめと小蓑庵に帰ってきた、しかし今度は庵の物を持ち出して出奔、関東の碓嶺門下を回って庵の悪口を言い、あげく自分が小蓑庵で飯田橋住である、とまで言って江戸本町一丁目の小蓑庵をないものように広言している、というものです。このあと書簡は、椿海が八月に府内に戻りさらに我儘増長し、当方へ佞言はしたが本当に詫びている様子ではない。従ってまず故郷上田生塚村の役人へ掛け合い村方に引取りを頼もうとしたがかなわず、次に領主役所に掛け合っても首尾であるので、町奉行所に願ひ出ようと連中一同で決定した。と、大変な成り行きになってきています。

しかしそこへ夏目成美<sup>⑤</sup>の番頭で、すでに江戸俳諧の大立者であった豊島由誓が椿海に同情して仲介してきました。当初小蓑庵側は、「一通りの不埒ではなく、俳諧を家業にしているも許されぬこと」と断りますが、由誓は重ねて椿海の為に佞を入れます。その効あつてか、書簡の最後は

不相なる義に候得共、久蔵宗匠の深切をも捨て難く、又は御地御連中<sup>④</sup>に対しても不風流に相い当り候間、先は生塚御役人中へ相届候一條を用捨致し、八州并奥羽両国、信州、越後、甲州、右の国々行脚を差留、上方筋経回の事は差免。尤椿海の名の義は取り上ずゆるし置候。——中略——  
万々一椿海在所へ立帰り候沙汰も御座候て、内々生塚連中

の方え右話仰せ聞かせ下され度、願上げ奉り候。

さてさて人面獸心と申す者になり行不実を專一に致には恐入候。大工与四郎を忘れ、師恩忘却いたし此罪をにくむ。天地は之無く世界にも之有る間敷存奉候。はるかに御察し下さるべく候。尤も右の始末椿海兄伝蔵へも申し遣り候。いさる以吉坊より此の上の事は御聞き下さるべく候。願上げ奉り候。

長月廿八日

成績様坐下

確嶺

と、訴え出るのはやめ、上方での椿海の活動を許す内容になっています。この書簡によればたしかに有節が小蓑庵でトラブルを起こし、いろいろ問題を起したことは間違いないようです。しかし、そこに至るまでには、宗匠不在の小蓑庵における弟子達の勢力争いなど、才能ある有節をいたたまれない仕儀に追い込んだ状況もあったのではないのでしょうか。由誓が何度も小蓑庵をなだめ、鳳朗の弟子にも同情されていたことや、書中の以吉坊などライバルの存在を考えれば、あり得ることと思えます。

こうして江戸を去り、上方へ向って行脚に旅立っていった椿海<sup>②</sup>有節ですが、恩人由誓の紹介状は行く先々で彼を助けてくれたことでしょう。師の確嶺にしても年次はわかりませんが、御無心申上げ兼ね候得共、拠無く御頼申上げ候。椿海の羽織に致したく候間、上田縞一反御見立下され御求め下さる代料、御取替置き下されたく、程無く御地え参り申すべく候。——中略——  
価は金三步位の処にて宜しく、縞柄は確月様御見立て下されたく奉りねぎ上候。

八月五日

成績様

碓嶺

と、成績の母と思われる碓月に椿海の羽織の見立てを頼んでおり、師弟の間には暖かいものがありました。留守中の出来事の真相をつかめず、優秀な弟子であった有節を放逐する術しかなかったのではないでしょうか。

天保五年有節は三十歳、諸国行脚中の句と思われるものを『五仲庵有節句集』から拾ってみましょう。

行脚の頃北総の国にたとりて思わず行き暮て樹下に一

夜を明す

眼のさめて思へは野也ほとゝきす

山径独行

木かけ見て時さす里や閑古鳥

苔掃て寝覚めやしなふ四月哉

翁忌は湖東にありて

吹きこむよけふは時雨の鳩のはな

越前国吉崎御坊

いくとせの泪やしみて苔の花

行脚の途上、辛く淋しい思いも幾度となくしています。しかし有節は後年自身の弟子に対して

風雅に魂を奪れ修行に寝食を忘れるは此道の常なから、

只騎旅そ足を休め休めて翌日の道を計るにしかすと文

海が西遊の餞別に申し送りぬ

油断して泊り忘れな花さかり

「翌日の道を計るにしかず」と助言する所など、行脚を通して地に足をつけ、風雅の道を究める逞しさを養ったことがわかり

ます。

天保七年、中山道愛知川宿の豊満社に立ち寄ることがあったなら、芭蕉堂蒼虬撰の奉納俳諧額を見ているかもしれませぬ。

(B) 京の師対塔庵蒼虬と五仲庵開庵

諸国行脚を経て有節は天保八年(一八三七)には京に住み、京八坂に対塔庵を開庵していた成田蒼虬に師事することになります。蒼虬は天保五年に江戸に十ヶ月ほど滞在したことがあり、その間由誓や碓嶺、鳳朗などと風交があったはずで、有節の事も知っていたのではないかと思えます。蒼虬に師事して三年後の天保十一年(一八四〇)三十六歳で有節は五仲庵を開き、京都で俳諧宗匠として立つことになります。

天保十三年、京都で惜しみなく後援してくれた蒼虬は八十二歳で亡くなり、幸運なことに五仲庵有節はその地盤の多くを受け継ぎます。

蒼虬老人野送りの時

同老人墓碑に供養

数珠音や花にむさんの一烟

我罪もわすれて聞や花に鐘

その年は芭蕉百五十回忌でしたが、有節は翌年二月京都大雲院に芭蕉追善俳諧を興行、その座には蒼虬と同じく天保三大家であった梅室、蒼虬門の梅通、芭蕉堂五世の九起、京の岱年ら錚々たる俳人がならびました。そしてこの追善俳諧集『花ぜんぶ』には、江戸の鳳朗、碓嶺、由誓の三人が冒頭に連なっています。

有明て日にゆづりけり臙かげ

月のあとおふて落けり山の雲

鳳朗

碓嶺

むれる蚊や暮をさまりて人に付く 由誓

江戸で自分を育ててくれた初めての師匠確嶺や、弟子を通じて庇護してくれた鳳朗、窮地を救ってくれた恩人由誓の句を揃って掲載できたことは、報恩の気持ちで理想的な形で示すものと思います。有節が江戸を後にして九年、確嶺はじめ宗匠達の喜びもひとしおであったでしょう。また「有明て」の鳳朗の句は、亡くなった蒼虬は有節に俳諧の新しい時代を託したのですよ、と言っているように感じられます。

さてこの『花ぜんぶ』追善俳諧には蕙逸、鳥都雄、芋丈、湖月、米友、陶年など、近江の俳人が多数出席しています。この頃までに有節は近江にも門葉をひろげ、後年愛知川の奉納俳諧の選者となる基盤を築いていたものではないでしょうか。また彼は一時大津に住んでいたことがあり、琵琶湖や近江路の佳句には見るべきものがあります。

身は湖汀の凍翁と成りて心は向上の一路に遊ぶ

手元まで波の明りや初手洗

鳩啼て果は知れけり野の霞

滋賀院<sup>④</sup>御殿の御物見に招かれて

湖見てもたりの寝覚めを花に鳥

音絶えて花と気易し三井の鐘

近江路にて

十六夜や雲と水とのなれ際

幻住庵旧跡

木啄鳥ものこす片枝や椎の花

湖辺

水上の雲にもまれてあしのはな

ほととぎす飛やお城を櫓かけ

(C) 五仲庵の名声と幸せな師弟像

弘化二年(一八四五)四十一歳の時、有節は年間撰集『芳新集』の募集発句を開始し、中断もありましたが十数編を数えています。この後有節の名声は日増しに上がり、矢羽勝幸氏によれば安政以降諸国より刊行された俳書で彼の作品を載せないものはないほど、と言われています。安政二年(一八五五)の俳諧番付「蕉風俳諧名家競」では、西の方大関江戸孤山卓郎について関脇京五仲庵有節の名があがっています。

また有節は幕末の京都俳壇で高齡の梅室と共に江戸、大阪の俳人らと広く交わり、門人の育成に力を注いでいます。かつて江戸小養庵での不遇な修行時代を送った有節ですが、多くの門人達を擁し育成する立場となった彼の一面を『五仲庵有節句集』から見ることにしましょう。有節には三人の有能な弟子があり、

芸術拙無して六十年の非いまた改むるあたわす。され

と門人に文海・自長・鳥岳なる者ありて各四条の町に

推敲の机をたて、朝暮親しく行き通ひて我老を慰むる

にたれり

月花にあまる望みや三つの庵

酒は百薬の長なりといへとも酒人の飲むの諺もあれば

只よきほとにみたさるゝこそよけれと門人に示す

色に出て興な覚しそ唐からし

と、幸せな師弟関係を結んでいます。

そして慶應二年(一八六六)春、有節は豊満神社奉納俳諧の選者となりました。蒼虬は天保十三(一八四二)年に八十二歳

で亡くなっていますが、その二十五年後、近江愛知川の豊満神社拝殿で師弟は奉納俳諧の撰額を隣り合って掲げられたことになります。有節の胸は感無量なものがあつたのではないでしようか。

今回有節の句は近江界隈のものに絞りましたが、京都でのおだやかな日々や北陸曳杖の旅の句、心のこもった挨拶句など、数多くの佳句があります。幕末明治は俳人達にも激動の時代であつたわけですが、有節の句は近代人が良き時代を懐かしく思い起こす、優しさに溢れていると思います。そのいくつかを紹介しておきましょう。

不二の絵に 雪ながらみとりに明て三保のはる

捨てかねて植る八日の薺かな

被衣なと野杭にかけて若菜つみ

愚しき手一ひらや雪若菜

鳥岳が開業に及ひていよく道のかたきを示す

出抜けても雪な忘れそ土筆

祝昇進 いさのほれこゝを麓に春の山

倒木の田に退けすある余寒かな

はつ耳に驚嬉し庵の朝

うくひすや声に裏ある風の中

木々稀に梅の八坂や朝月夜

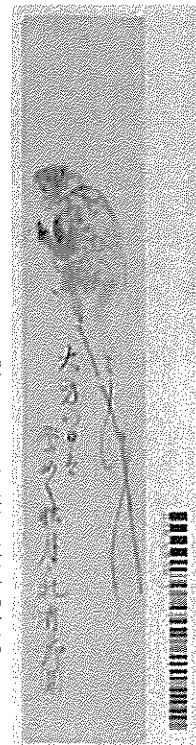
題梅花書屋 侘しさの相手や窓の月と梅

祇園にて 日毎来て花も身果す東山

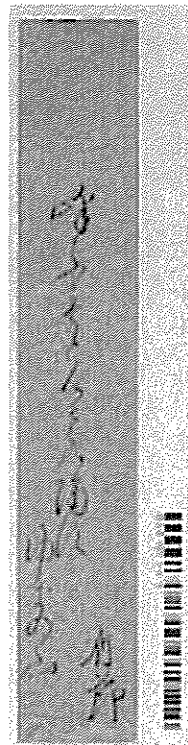
梅室悼 人も木も時来てかるゝあらし哉

顔見世や雪も四条の銀世界

年中風雅に遣はれて風雅にあそふ事あたはず  
眼にかむ梅も柳も師走哉



おおかたの日は祭りめく睦月かな (国際日本文化研究センター蔵)



峰ふもとけふは隔すゆきの山 (国際日本文化研究センター蔵)

頭をめぐらせば、豊満神社の広い拝殿に所狭しとならぶ大きな俳諧額の一群。そこには、百年以上前の文雅の世界が眠っています。風化しているものも多いのですが、現代の技術で復元が実現すれば「読み取る」営みを通して、風雅を競った先人の江戸時代がいきいきとよみがえってくるでしょう。

(成蹊大学院博士後期課程在学)

(注)

①木壺『文音行脚・俳諧見聞録』(近江商人博物館蔵) 天保十年蘭兮編に「人日庵木壺日野村大和屋」。「類題発句集花筏弘化三年の名録近江の項に、蘭兮とともに木壺の記載あり。

②旧派俳諧 明治二十年代以降、尾崎紅葉、伊藤松宇、正岡子規らが新しい俳句を提唱して新派俳句と称されたのに対し、旧来の伝統を守る俳諧宗匠、その流れをくむ人々、その俳諧俳句をいう。子規は「称して月並調といふ」としてその特徴を「穿ち、理屈、教訓などの作為、意匠の陳腐、表現の弛緩、用語の極限、系統流派の尊重」の五箇条をあげた。

③蒼虬 俳諧師。宝暦十一年(一七六一)〜天保十三年(一八四二) 八十二歳。本名成田利定。別号芭蕉堂二世、槐庵二世、南無庵二世、对塔庵。關更門。加賀藩士の子として金沢に生まれる。父の死後官を辞して上京、關更を頼った。天保五年江戸に滞在、天保六年帰洛。天保俳壇のリーダーとして活躍し、鳳朗、梅室とともに「天保三大家」と称される。

④『しぐれ会』 例年十月十二日の芭蕉忌に義仲寺で営まれる法要を「時雨会」といい、献納された発句を集めて、記録、記念するために年間句集『しぐれ会』を刊行した。宝暦十三年を嚆矢とし、天保五年まで確認できる。

⑤『類題花筏集』 弘化三年(一八四六) 薄墨庵鷺秋編  
⑥ 阿自岐神社 豊郷町安食西にある百濟からの渡来人阿自岐氏に由来する神社と言われる。池泉多島式庭園を持ち、古代の様式を留める。

⑦ 生塚村 上田城北西の地。  
⑧『書簡による近世後期俳諧の研究・俳人の手紙正統編』矢羽 勝幸一九九七年

「有節自撰『五仲庵有節句集』」矢羽勝幸・二松学舎大学東洋研究所集刊第25 平成六年度

⑨ 夏目成美 寛延二年(一七四九)〜文化十三(一八一六) 六十八歳。江戸蔵前の札差井筒屋の当主。中興俳諧期の俳人。京の重厚、几董、蝶夢、暁台、蓼多ら多くの俳人と風交があり、一茶を後見した。由誓は井筒屋の番頭で、成美に師事した。

⑩『類題花筏』名録近江に掲出

⑪ 天台宗総本山比叡山延暦寺直轄の門跡寺院で、「本坊」「総里坊」と呼ばれる。一六一五年、御所より建物を移築したのがはじまり。江戸時代の狩野派の絵師「渡邊了慶」の襖絵と小堀遠州作の庭園が有名。江戸時代末まで天台座主となった皇族代々の居所だったため、高い格式を誇る。

○奉納俳諧額に出る地名

- 八鳥 彦根市服部のこと。
- 肥田村 愛荘町の北隣の町(彦根市服部)
- フコウジ 琵琶湖に近い普光寺村(彦根市普光寺)
- イナバ 愛知川西隣の稲葉村(彦根市稲葉)
- 種村 愛知川対岸の旧神崎郡能登川町種(東近江市種)
- 妙福寺 彦根市千尋にある妙福寺と思われる。
- ナカノ 八日市中野か
- 大久保 坂田郡 伊吹町大久保
- 下ノ郷 犬上郡甲良町下之郷 愛荘町北東、豊郷の東隣あたり地域の総称

○五仲庵有節略年譜

文化二年 (1805) 〓明治五年 (1872) 一・二九 六十八歳。沢

元衡。はじめ与四郎、別号椿海、五仲庵。上田在生  
塚 滝沢家の生まれ。兄伝蔵

文政三年 (1820) 十六歳。文政年間に大工となるか

天保元年 (1829) 二十五歳 小叢庵確嶺に入門するか

天保四年 (1833) 二十九歳 確嶺留守中に種々不埒

天保五年 (1834) 三十歳 正月出奔、史千宅へ。二月江戸甲午

の大火で帰庵。再度欠落ち。八月帰  
府。由誓の仲介で役人への届出は免  
がれる。蒼きゅう十か月江戸滞在

〓〓〓諸国遊歴〓〓〓

天保六年 (1835) 三十一歳 名古屋で有節と改号。『浜荻集』

刊行。

天保八年 (1837) 三十三歳 京住、八坂対塔庵蒼虬に師事。

『たねぶくる』刊行。

天保十年 (1839) 三十五歳 梅室大阪へ。蒼虬豊満社奉納句撰

天保十一年 (1840) 三十六歳 京に定住五仲庵を開く。

天保十三年 (1842) 三十八歳 三月十三日成田青虬没 (八十二

歳) 芭蕉百五十回忌

天保十四年 (1843) 三十九歳 『花ぜんぶ』芭蕉追善俳諧あり。

弘化二年 (1845) 四十一歳 年間撰集『芳新集』募集発句を始

める

弘化三年 (1846) 四十二歳 確嶺没

嘉永元年 (1848) 四十三歳 『霜雲集』越中氷見。

嘉永五年 (1852) 四十七歳 桜井梅室没 (八十四歳)

安政二年 (1855) 五十歳 俳諧番付「蕉風俳諧名家競」西の

関脇となる。大関は卓朗。

安政三年 (1856) 五十一歳 『芳新集』ここまで十編刊行

安政六年 (1859) 五十四歳 由誓没。七十一歳。

元治元年 (1864) 六十歳 門人に文海・自長・鳥岳。各四条

の町に推敲の机をたつ。

慶應二年 (1866) 六十二歳 春。豊満神社俳諧額撰。『花廼井

集』四卷 京松屋久兵衛

慶應三年 (1867) 六十三歳 平安人物志に「澤有節・号五仲庵

下河原」

明治元年 (1868) 六十四歳 祇園下河原鷺尾丁に転居。

明治五年 (1872) 六十八歳 有節没

明治十四年 (1881) 『花の井』復刻。大津町小川義平・平安社

\* 奉納俳諧の発句には適宜読み仮名、ルビを振った。

○参考文献・参考図書

「有節自撰『五仲庵有節句集』」矢羽勝幸・二松学舎大学東洋

研究所集刊第25 平成六年度

『俳文学大辞典』角川書店

『時雨会集成』平成五年十一月 義仲寺・落柿舎

『近江の連歌俳諧』木村善光・サンライズ印刷出版